令和４年８月16日

丸亀市長　松永恭二　様

株式会社アズ　代表取締役　宗像佳代

演劇ワークショップで見つめる「おやこのつながり」実演ワークショップ講座
講師所感

企画内容について
2022年８月７日（日）午前10から16時まで、実演ワークショップを企画しました。昼食休憩１時間を挟み、合計５時間の枠のなかで、午前中は場づくり、居心地の良さを中心として、相手の話を聴くワークショップとし、午後は、聴いた話を即興で再現劇として演じることをゴールとする内容にしました。昨年度は、参加者の体験を聴く、劇団員がそれを再現劇とするのを鑑賞するという企画でした。今年度は、最終的には24名となった参加者自らが互いの体験談を自分たちで演じるという内容にまで発展させました。

実施内容と効果
　午前中ワークショップの部では、簡単なガイダンスのあと、一つの大きな円になり、丸亀市、香川県内から全員の方がお名前と参加動機を紹介できました。
　全体の雰囲気を柔らかくするために、プレイバックシアターが基礎としている価値観「こども心を取り戻す」ことを提案し、手遊び「アマティンガロ」を指導、実演しました。初めてのことにチャレンジする、パートナーを取り換えていくことで知り合っていく、みんなで揃って呼吸を合わせてリズム感を整えていく、などの課題を達成していきました。そのプロセスを経て、一体感が醸成され、即興性や協同性が高まり、芸術の一分野である音楽に馴染み、会場はなごやかな雰囲気になっていきました。
　「みんなの劇場」のコンセプトであるダイバーシティとインクルージョン、その二つの価値観の達成を目指しました。「ダイバーシティ」については、アクションメソッドであるマッピング手法を導入し、20数名のダイバーシティを共通理解としました。この企画に全く初めて参加する人、これまで実施してきたオンライン企画、半日の対面ワークショップに参加した人、プレイバックシアターに馴染みのある人などが順列として可視化され、その差異を体感しました。「インクルージョン」については、今日初めて参加する人、演劇経験のない人などから、居心地についての本音、不安や心配が浮上する進行にしました。「参加したものの不安です」「実はここに居ていいのかと思っているのです」など、いわゆる「社会的弱者」「マイノリティ」からの本音の気持ちや感情が表出されました。参加者全員が声にならない声に気づけるように、マイノリティの事情に寄り添えるように、否定的な感情をも受容できるように進行しました。
　午前中の最後には、３人の小グループで互いの個人的な体験を語る、そのエピソードにある中核となるもの、感情や気持ち、訴えたいこと、に焦点をあてて傾聴する演習を実施しまし

た。通常の「聞き方」とは異なる「聴き方」、つまり、アドバイスや忠告をせず、また聴いている最中に自分が何を言おうかと考えてしまう「発信準備」をせず、ただひたすら傾聴する、傾聴してもらった心地良さを味わう、という体験でした。

午後は、参加者が即興劇、プレイバックシアターを演じる、今日初めての人でも演じられる、プログラムを用意しました。即興での「数集まり」、提案された役を即興でパートナーと演じる「ロールサークル」、与えられた役を 4 人で打ち合わせなく演じる「シンデレラ演習」を経て、実際のプレイバックシアター上演に至りました。2 本のストーリーが語られ、それぞれ 3 人の役者、合計 6 名の参加者が初めてプレイバックシアターを演じる体験をしました。いずれの演技もストーリーの語り手、テラーの満足を引き出しました。初めて演じた人に即興ゆえの不全感、未達成感があるのは常のことです。それでも、その場のテラーから、観客から、自分の演技が受容されたことを肌感覚で感じたと推察されます。通常の演劇手法では、このよう場で「ダメ出し」が用意され、「改善策」が検討されるものですが、そのような批判的、否定的な雰囲気にならないよう指導することを心がけました。

2 本のストーリーを演じたあと、3 人の小グループで、プレイバックシアター体験をシェアし、どういう学びを得たか、どういう効果があると感じたか、話し合いました。各チームからコメントを募り、全体の収穫としました。

今後に向けて

今回の 5 時間の企画、指導内容を見直し、今後への課題がどこにあるかを検討しました。もっとも顕著であるのは、「演劇経験がない、普通の市民がプレイバックシアターのアクターになれること」、「普通の市民が普通の市民のために演じることの素晴らしさ」を実感していただけなかったことです。今回、実際にプレイバックシアターのアクターとして舞台で演じたのは、演劇に馴染みのある層でした。5 時間という短い時間枠だったことに加えて、多様な背景や経験値を有する２０数名で構成されたグループであったこと、が大きな要因だと分析しております。

今後の可能性として、まず、プレイバックシアターの企画を継続すること、回数を打つこと、プレイバックシアターファンの人数を増やすこと、母集団を大きくすることをお勧めします。次に、プレイバックシアターファンの人数を増やすことに加えて、プレイバックシアターを市民に提供できる人材を発掘し育成することをお勧めいたします。今回、印象的だったのは、リピート参加者が半数以上を占めていたことでした。一つひとつの企画が成功し、浸透し、次へと繋がってきたことを嬉しく思います。過去の企画が成功したことの表れ、積みあがった企画の効果測定となったともいえるでしょう。そして、その先、が期待されます。

「みんなの劇場」のコンセプト、「ダイバーシティ」と「インクルージョン」の実現をプレイバックシアター企画でと望みます。「ここにはいろんな人がいるけど、その一人ひとりが大事な人であり、社会の構成員であり、自分自身もその内の一人。ここでは値打ちのある存在である。お互いがお互いを受容できて、繋がった感覚が得られた。誰かの役にも立てた。」宗像が思い描く丸亀市の「みんなの劇場」です。

参加者のなかには、子育て支援を念頭にして活動している方、演劇で社会に関わっている方など、よりよい社会を創ろうとの志を持っている方がいらっしゃいました。市民の皆様には、

孤立しがちな社会を回復するための手法、個人と社会のレジリエンスを高めるための手法であるプレイバックシアターを普及するパートナーとして活躍していただきたいと期待しております。

　以上、簡単ではありますが、講師所感としてご報告いたします。社会課題を演劇で、劇場で、という丸亀市さんのビジョンは、私どもプレイバックシアターに関わる者のビジョンそのものです。与えられた場で、精いっぱいの務めを果たす所存ですので、今後もどうぞよろしくお願いいたします。